

拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈（十八）」（『有明工業高等専門学校紀要』第四十五号）

拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈（十九）」（『国語国文学研究』第四十五号）熊本大学国語国文学会

拙稿「菅原道真研究―『菅家後集』全注釈（二十）」（『有明工業高等専門学校紀要』第四十六号）

『敍意一百韻』（『菅家後集』全注釈） 焼山廣志監修 道真梅の会（大牟田市民大学ゼミ）編

（3）川口久雄著『平安朝漢文学の開花―詩人空海と道真』（吉川弘文館）

「菅原道真の文学と元稹白楽天の文学―大宰府における「敍意一百韻」詩をめぐる―」一三五頁―一三六頁

金原理著『平安朝漢詩文の研究』（九州大学出版会） 「第二章 貞観延喜の時代 菅原道真の漢詩」二七二頁―二七四頁

（4）波戸岡旭著『宮廷詩人菅原道真』の注（8）の中に次の一文がある。

「敍意一百韻」が十句乃二十句の小節をなすと看做すのは、全くの私見による試案である。因みに金原理氏は随意十段落とし（「菅原道真の漢詩」（『平安朝漢詩文の研究』）、大岡信氏は十八段に区切っている。最近の研究成果の一つに柳澤良一氏の「敍意一百韻」全編に亘る注釈稿がある。その中で「全体の構成と要旨」として、全篇を「序・一・二・三・四・五・終章」と区切り、第二章は更に四節に分け、第三章を更に三節に分ける構成法を考案されている。（章毎の句数は随意。）（『菅家後集』注釈稿（十七）八十五頁―八十六頁《『金沢学院大学紀要』第六号》）

（5）川口久雄著『平安朝漢文学の開花―詩人空海と道真』（吉川弘文館）